

掛川市における児の発達と母の健康との関連（第2報）

-母親の心身の健康と子どもの発達は関連しているのか-

久米美代子 村山より子 野口真貴子 原田通予
飯塚幸恵 田中志のぶ 服部和代

要 旨

児の発育において母親が寄与するところが大きい。そこで、掛川市において児の成長発達への母親の精神的影響の関与について検討することを目的に、2 か月児の説明会に訪れた母親およびその児 121 名を対象に調査を行った。

精神的健康状態の指標としてエジンバラ尺度 (EPDS) を用いた。ただし、今回は 10 項目の設問を加算したエジンバラ得点ではなく、個々の質問への回答をデータとして用いた。

児の体重を従属変数、各エジンバラ質問の回答および母親の年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。

重回帰分析の結果、児の体重変化に有意に関与するのは「EPDS1_10 自分自身を傷つけると言う考えが浮かんできた」であった。EPDS の設問は、内容的に見て、不安と抑うつ (うつ) 項目が内包している。「自分自身を傷つけると言う考えが浮かんできた (自虐)」はうつに類するものと思われる。産後うつが児への成長に関与するとの指摘は諸家が指摘しているところであり、今回の結果はそれを裏付けるものと考えられる。助産師と保健師は母親のうつ傾向に気をつけるとともに、特に、自虐行為をサインとしてとらえる必要性があると示唆された。

母親のメンタルヘルス、特に産後うつについて留意する必要がある。

I. はじめに

21 世紀の母子保健の主要な取組を提示した「健やか親子 21」は、産後うつ病発生率の減少、子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減を課題としている。

出生後の新生児は、栄養摂取、身体的ケア、生活環境や安全の確保等に関して完全に依存しなければならず、特に母親に依存することが多い。養育者が生存のための生理的欲求の充足を行わない限り、児は生存できないし、その養育者は主として母親である。それゆえに発達初期の母子関係の成り立ちは後の児の発達に強く影響するものとして注目されてきた。

Murray (1996) は産後うつの女性は彼女らの児に対する受容・感情・責任感が低く、児の認識発達や注意力に障害をもたらすと述べている。

また吉田 (2000) は、うつ病の母親は子どもが

発するサインを敏感に感じ取ったり、それを的確に反応したりすることができず、母子相互作用に障害をきたしている。また、母親から子どもへの影響だけでなく、逆に子どもから母親への影響もあるとしている。このように、出産後にみられる母親の精神的な障害は、母親自身のみでなく、母親の社会環境、乳児の気質行動、そして母子相互作用のいずれにも関連する。特に出産後早期はこれらのいずれにも重要な意味をもつ時期であることを示しており、児の発育において母親が寄与するところは大きい。

しかし、日本では母の心身の健康と子どもの健康および成長・発達の関係について詳しく研究されているものは少ない現状がある。

そのため、平成 21 年度 MONAC・掛川市健康調査において、母親の心身の健康状態と児の成長発達の関連を明らかにすることを目的として、2 か月児の説明会に訪れた母親およびその児

231名を対象に、母親の精神的健康状態をエジンバラ産後うつ病自己評価票、SRQ、GHQの自記式質問用紙を用いて調査した。結果、妊娠中および産後の貧血の有無はSRQ、GHQ、エジンバラの全ての指標において有意な関連は得られず、産後2か月の時点においては妊娠中の貧血の影響がないと考えられ、母親の精神的状態の指標（エジンバラ、GHQ、SRQ得点）と児の体格には有意な関連は得られなかったと報告した。

そこで、第2報では児の発育への母親の精神的影響の関与について検討した。

II. 方法

1. 調査対象

2か月児の説明会に訪れた母親およびその児121名を調査対象とした。

2. 調査期間

平成23年6月から平成23年7月

3. 調査方法

徳育保健センターで行われた2か月児説明会に訪れた母親に口頭と文書にて研究の目的、方法、倫理的配慮を説明した後、調査書を配布した。調査書は帰宅時に回収した。

4. 調査内容

エジンバラ産後うつ病自己評価票、GHQと自記式質問用紙から心身の健康状態（年齢、職業の有無、児の性別、家族構成、子育てサポートの有無、睡眠時間など）および児の発達状態（出生日、在胎週数、出生時と1か月時の体重、身長、頭囲）を把握した。

5. 分析方法

児の体重を従属変数、各エジンバラ質問の回答および母親の年齢を独立変数とした重回帰分析を行った。使用した統計ソフトはSPSS19.0 (J)である。

6. 倫理的配慮

研究協力施設への依頼は、乳児健診担当保健師に文書および口頭にて研究目的と方法について説明を行い、承諾を得た。対象者への依頼は担当保健師を通して行なった。

対象者には、調査者より研究内容と方法について文書および口頭にて説明した。調査への協力は自由意志によるものであり、研究経過においていつでも辞退ができ、そのことで不利益を被ることがないことを説明し、調査用紙の返却で同意を得られたものとした。得られたデータは「個人情報保護に関する法律（個人情報保護法）」に基づき適切に取り扱った。

なお、本調査の実施は東京女子医科大学倫理委員会の承認を得て行った。

III. 結果

1. 対象者の概要

母親の平均年齢は 30.1 ± 4.5 (n=121)であった。また児の性別は男児67名、女児54名であった。職業の有無では、有りが68名で、無しが53名であった。家族構成は、拡大家族31名(25.6%)、核家族90名(74.3%)であった。

子育てをサポートしてくれる人がいないと答えた母親は6名(5.0%)のみであった。

また平均睡眠時間は5.9時間 \pm 2.5時間で、眠れないと感じている母親は10名(8.3%)程度であった。

2. 母親の精神的健康状態と児の体重変化への関与

測定・観測項目は、1か月間の児の「体重変化」(1か月健診時の体重－出生時体重)で、高得点ほど発育が良いことを意味する。

精神的健康状態の指標としてエジンバラ尺度(以後EPDSとする)を用いた。ただし、今回は10項目の設問を加算したエジンバラ得点ではなく、ここの質問への回答をデータとして用いた。保健師が母親のどのような気分、状態について着目すべきなのか、内容的に吟味すること

に主眼をおいたためである。

各設問は以下の通りである。

なお、EPDS1_1 および EPDS1_2 は得点を逆転化し、すべての得点は、高得点ほど精神状態が悪いことを意味するものとした。

EPDS1_1 笑うことができたし、物事のおかしい面もわかった。

EPDS1_2 物事を楽しみにして待った

EPDS1_3 物事が悪く行った時、自分を不必要に責めた

EPDS1_4 はっきりした理由もないのに不安になったり心配した

EPDS1_5 はっきりした理由もないのに恐怖に襲われた

EPDS1_6 することがたくさんあって大変だった

EPDS1_7 不安なので、眠りにくかった

EPDS1_8 悲しくなったり、惨めになった

EPDS1_9 不幸なので、泣けてきた

EPDS1_10 自分自身を傷つけると言う考えが浮かんできた

重回帰分析結果を表1に示した。このときのR2は.150であった。

児の体重変化に有意に関与するのは「EPDS1_10 自分自身を傷つけると言う考えが浮かんできた」であった。

表1 母親の精神的健康状態と児の体重変化との関係

係数^a

モデル		標準化されていない係数		標準化係数		
		B	標準偏差誤差	ベータ	t値	有意確率
1	(定数)	1227.284	275.619		4.453	.000
	母の年齢	-1.432	8.708	-.018	-.164	.870
	EPDS1_1	95.648	427.961	.027	.223	.824
	EPDS1_2	42.355	172.315	.034	.246	.806
	EPDS1_3	27.507	58.489	.061	.470	.639
	EPDS1_4	-20.753	76.486	-.044	-.271	.787
	EPDS1_5	153.527	110.956	.213	1.384	.170
	EPDS1_6	-15.362	53.003	-.037	-.290	.773
	EPDS1_7	129.850	81.410	.221	1.595	.115
	EPDS1_8	-107.135	81.253	-.192	-1.319	.191
	EPDS1_9	-174.085	143.404	-.193	-1.214	.228
	EPDS1_10	-255.062	126.891	-.261	-2.010	.048

a. 従属変数 体重変化

IV. 考察

Murray (1996) は産後うつの女性は彼女らの児に対する受容・感情・責任感が低く、児の認識発達や注意力に障害をもたらすと述べている。

また、吉田(2000)はうつ病の母親は子どもが発するサインを敏感に感じ取ったり、それを的確に反応したりすることができず、母子相互作用に障害をきたしている。また、母親から子どもへの影響だけでなく、逆に子どもから母親への影響もあるとしている。すなわち、イライラして扱いにくいなどの児の気質や行動が、母親の育児機能に影響を与え、それが児の発達障害をもたらし、母親の育児対処行動の機能不全も起こしているとしていると述べている。

今回の調査では、母親の精神の健康状態の指標を周産期のメンタルヘルスの研究によく使用されているエジンバラ産後うつ病自己評価票を用いた。

エジンバラ産後うつ病自己評価票は、抑うつ症状を見つけるためにスクリーニングテストとしてよく使用されている。

重回帰分析の結果を解釈すると、児の体重変化に有意に関与するのは「EPDS1_10 自分自身を傷つけると言う考えが浮かんできた」であった。EPDS の設問は、内容的に見て、不安と抑うつ(うつ)項目が内包している。「自分自身を傷つけると言う考えが浮かんできた(自虐)」はうつに類するものと思われる。

産後うつが児への成長に関与するとの指摘は諸家が指摘しているところであり、今回の結果はそれを裏付けるものと考えられる。

産後うつ病は、その後の子どもの発達にも影響を及ぼすことが報告されている。母子相互作用は母親から児への、児から母親への相互の働きかけを通じて確立されていくものであるから、新生児の発達や行動が母親の情緒的コミュニケーションに影響を与えるということである。

このように、出産後にみられる母親の精神的な障害は、母親自身のみでなく、母親の社会環境、乳児の気質行動、そして母子相互作用のいずれにも関連する。特に出産後早期はこれらの

いずれにも重要な意味をもつ時期であることを示していた。故に、助産師や保健師は母親のうつ傾向に気をつけるとともに、特に自虐行為をサインとしてとらえる必要があると示唆される。母親のメンタルヘルス、特にうつについて留意する必要がある。

さらに、Walkers ら(2003)は母親がうつ状態であると、児の身体の発達、認識の発達、社会性の発達、行動の発達と感情の発達に遅れを来たと述べているように、児の発育発達への母親の精神的影響の関与についての評価は、児の1か月間の体重変化からだけではなく、児のメンタルヘルスからも評価が必要である。そのためにも時系列的に調査する必要がある、今後さらに検討が必要である。

V. おわりに

今回の調査でも、掛川市の産後2か月時点ではGHQ12 およびエジンバラ産後うつ病自己評価票のいずれの得点も低く、ほとんどの母親の精神状態は健康であったが、今後、児のメンタルヘルスの観点からも、対象者数を増やし、時間設定を長くして調査していく必要があるであろう。

VI. 謝辞

本調査にご理解を示し、調査に協力してくださった2か月児説明会に訪れた母親の方々、ならびに掛川市保健予防課の保健師の方々に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- Aukett M, et al. (1986). Treatment with iron increases weight and motor development. *Arch Dis Child*. 61:849-857
- Bifulco, A., Brown, G.W., Moran, P. et al(1998). Predicting depression in women: The role of past and present vulnerability, *Psychological Medicine*, 28, 39-50.
- Beard JL, et al. (2005). Mental anemia affects postpartum emotions and cognition. *J Nutr*. 135: 267-272.
- Eshel N, et al. (2006). Responsive Caregiving: Interventions and Outcomes. *Bulletin of the WHO*. 84(12):991-998.
- Field, T.(1998). Maternal depression effects on infants and early interventions. *Preventive Medicine*, 27: pp200-203.
- Murry L & Cooper P (1996). The impact of postpartum depression on child development. *Int Revpsych*. 8:55-63.
- 岡野禎治、村田真理子、増地聡子他(1996). 日本版エジンバラ産後うつ病調査票(EPDS)の信頼性と妥当性,精神科診断学,7,523-533.
- Olney DK, et al. (2007). Young Zanzibari children with iron deficiency, anemia, stunting, or malaria have lower motor activity scores. *J Nutr*. 137(12): 2756-2762.
- Richter L (2004). The importance of Caregiver-Child Interactions for the Survival and Healthy Development of Young Children. Geneva: WHO Dept CAHD.
- Walker S, et al. (2003). Child development: adverse outcomes in developing countries. *CL Oral Investing*. 7(1): 2-7
- WHO (1992). The prevalence of anaemia in women: A tabulation of available information. Geneva: WHO.
- 吉田敬子(2000). 母子と家族への援助, 96-112, 金剛出版.